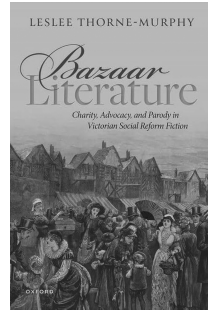


## 書 評

Leslee Thorne-Murphy, *Bazaar Literature: Charity, Advocacy, and Parody in Victorian Social Reform Fiction*  
(Oxford University Press, 2022)

大竹 麻衣子 (桜美林大学)



本書の内容を一言でまとめるのは難しい。書名と各章題からは、バザーをめぐる様々な言説やバザー会場で流通した読み物の分析を通じてヴィクトリア朝におけるバザーの社会的・文化的意味を明らかにし、いわゆるキャンノンも含め同時代に広く読まれた小説におけるバザーの表象について論考するという内容が思い浮かぶ。それはその通りなのだが、実際に本書を読むと、そういった大まかな予想を超えて展開される議論の複雑さと奥行き、含意の大きさに驚かされる。それは、本書の副題の3つのキーワード—charity, advocacy, parody—にも示されている。最初の2つは容易にバザーと結びつくが、パロディにはやや当惑させられる。しかし、本書を読むとパロディという概念がバザーというイベントを構成する根本的要素の一つであることが分かる。著者 Leslee Thorne-Murphy は、序章で James Joyce の *Dubliners* (1914) に登場するバザーの場面に言及し、そこから読み取れる皮肉や矛盾を孕んだ複雑な含意を指摘する。そして、ジョイスはモダニスト的なひねりによってバザーにそれらの含意を持たせた訳ではなく、19世紀以来、長らく使われてきた定番の文学的修辞としてバザーを用いているのだと主張する。多くの読者はこれにも驚かされるのではないだろうか。しかし、このような驚きは、本書の読了後は、ヴィクトリア朝におけるチャリティ文化や社会改良と文学の関係を考える上での不可欠な了解事項に変わる。本書は、3部構成の全7章からなり、各章の議論はそれ自体で完結しているが、前後の章と有機的、発展的に結びついている。ここから各章の内容を順に概観していきたい。

序章の説明によると、英語のバザー (bazaar) はベルシャ語からの借用語

で、中東の市場通りを模した、屋台 (stall) が列をなす販売会場を指す言葉として19世紀から使われるようになったという。つまり、バザーは呼び名自体に模倣、パロディの含意がある。第1部では、19世紀のイギリスにおけるバザー文化の成立と発展、特質が語られるが、その前半をなす第1章では、バザーの始まりと急速な広がりが説明される。イギリス初のバザーは、ナポレオン戦争の終結後間もない1816年に、もともと軍関係の物資の保管に使われていた空き倉庫の活用のアイディアから生まれた。John Trotterは自らの所有する倉庫をカウンター付きの小区画に分け、主に戦争未亡人向けに物品販売用のスペースとして安価で貸し出し、敷地全体を「ソーホー・バザー (Soho Bazaar)」と名付けた。さらに、戦争で儲けたイメージを払拭しなかった彼は、困窮した未亡人が手作り品を売ることで(売春に手を染めたりせずに)子どもを養うのに役立つという、慈善としての目的をこれみよがしに追加した。つまり、バザーの始まりには金儲けと慈善、偽善が混在していたわけである。ともあれTrotterのバザーは大盛況となり、ロンドンにはこれを真似した空き倉庫を利用したバザーがあったという間に十数箇所も開設されたという。

善き目的のために女性が手作り品を売るマーケットという図式は大変強力だったらしく、ソーホー・バザーの開設から早くも2年後には様々な慈善団体がチャリティ・バザー (charity bazaar) と銘打って、女性の出店者が手作り品を売る期間限定のマーケットを開催し始めたという。ここで起きた大きな変化は、出店者がお金に困っている女性ではなく、むしろ最も裕福な階層の女性になったことである。イベントを主催したのは地域社会や社交界のリーダー的な女性であった。彼女たちは地元の教会の修繕から学校設立まで大小様々な慈善事業の後援者として資金集めのバザーを開催した。レディが手作り品を売るという新奇な試みは、社交と慈善を兼ねて人々が集う場としてたちまち広がり、やがて恒例のイベントになったという。こうしてバザーは19世紀における最も効果的な資金集め的手段となり、テーマを持たせた会場装飾やコスチューム、エンターテインメントなど、様々な創意工夫が凝らされ、年々大掛かりになっていった。

第1部の後半をなす第2章では、バザーの主催者あるいは参加(出店)者となった女性たちをめぐる状況とチャリティの形態としてのバザーの矛盾

に焦点が当てられている。Thorne-Murphyは、バザーは女性たちにチャリティを通じた社会参加の機会を与えるものだった一方で、伝統的なチャリティの担い手としての女性像が当の女性たちによって都合よく利用されたり、歪められたりした場でもあったと指摘する。慈善のための資金集めという名目で、人前で物を売るというレディには相応しくない活動をするバザーは、女性たちに期間限定で行動の自由度、許容度を緩めさせた。そのため、バザーは他の出店者との競争心を煽られながら、支援者(男性客)を引き寄せるために女性的な魅力を振り撒いたり、客との浮ついたやりとりを楽しみつつ、法外な値で品物を売りつけたり、センチメンタルな出会いを期待したりする場ともなったという。

バザーという場の浮かれた空気と本来の高尚な目的との矛盾を、関係者は熟知しており、鋭い自己批判を向けていたことを、Thorne-Murphyは当時繰り返し再版されて複数のバザー会場で売られ、人気を博した読み物を例に示している。Robert Louis Stevensonによるこの鋭くウィットに富んだ風刺文は、バザーは慈善のためにお金を寄付することを娯楽に変えた発明であり、人々は買い物ごっこをしては、要りもしない商品がこちらからあちらへ移動し、それがまた次のバザーの売り物になると指摘している。著者は、ヴィクトリア朝のチャリティ文化は我々が一般に思うほど単純ではなく、中上流階級の人々は、チャリティに参加することで独善的な自己満足に浸っていたというよりも、偽善や矛盾への自己省察や、それらを自己他への皮肉や風刺に変えるしたたかさを持っていたと主張する。

第2部は特定の社会的理念や運動を支持する作家が、活動資金集めのバザーで売るために書き下ろした作品についての論考である。第3章では反穀物法同盟主催のバザーのためにHarriet Martineauが書き下ろした物語*Dawn Island* (1845)、第4章では奴隷制廃止運動のバザーのためにElizabeth Barrett Browningが書き下ろした詩“The Runaway Slave at Pilgrim’s Point” (1848)について論じられている。いずれも同時代を代表する大きな論争、運動に関わるものである点でも興味深いが、バザーの掲げる大きな理念(穀物法廃止や奴隷制廃止)に対する作家たちの全面的な支持と、バザー主催者が用いるレトリックに対して抱く違和感のギャップに着目することで見えてくるものがあると気づかされる密度の濃い論考である。

Thorne-Murphyによれば、バザーの主催者たちは自分たちの目標や理念が、政治的・社会的な論争的になっている場合でも、チャリティのレトリックすなわち、この活動は道徳や宗教に立脚した人道的なものであるという主張を用いて、それらが論争の余地のないものであるかのように提示するという。また、このレトリックを用いる際には、バザーが女性主導であることが重要な意味を持つという。政治や経済に直接関与することはないが、生来、優れた道徳心や慈悲心を持つ存在である女性が支持する目的、活動であれば、あらゆる利害や対立を超越して万人が支持できるという論理である。著者は、反穀物法同盟も奴隷制廃止論者も、その運動のために道徳や宗教、女性らしい慈悲心を引き合いに出すチャリティのレトリックを用いたが、そのレトリックとそれぞれの理念の核となるものや現実的戦略が矛盾していたことを指摘し、それに対する批判的な応答として2人の作家の作品を読み解いている。

第3部はヴィクトリア朝に幅広く読まれた作家が作品中でどのようにバザーを描き、どのような意味を持たせたのかについての論考である。第5章はCharlotte M. Yongeの2つの作品 *The Daisy Chain* (1856) と *The Three Brides* (1876)、第6章はGeorge Eliotの *The Mill on the Floss* (1860)、第7章はFrances TrollopeとAnthony Trollopeそれぞれから1作品 *The Vicar of Wrexhill* (1837) と *Miss Mackenzie* (1865) を取り上げている。いずれの章も各作家のバザーとの関わり、スタンスに触れた上で、それぞれのバザーの描き方を分析している。各章の論考から、これらの作家のバザーやチャリティに対する見方や態度は互いに異なっているが、作品中でのバザーの用い方には共通点が多いことがわかる。どの作家もすでに文化的了解事項となっていたバザーという場の様々な含意をプロット展開上の仕掛けとして効果的に用いていることが分かる。Thorne-Murphyによると、バザーのお祭り騒ぎとパロディ、放縦さといった性質を、共同体を崩壊させたり、逆に結束させたりする力を持つ隠れた状況を露わにするものとして利用しているのだという。第6章の *The Mill on the Floss* におけるバザーの場面の解釈は、作品全体を貫く神話のモチーフや作者エリオットの思想の核心をなす共感の重要性、読者と批評家を悩ませ続けるクライマックスの洪水の場面とも緊密につながるものとして提示されており、非常に読み応えがある。

本書の魅力は第一にバザーという小さな切り口から深く広く掘り下げられていく知的探究の興奮と充実感にある。最初は特殊なものに見えていたバザー文化やその文学的表象への着眼は、読み進めるにつれて、より普遍的な問題意識に直結しており、大きなレベルでの考え方の転換を促すものだと気付かされる。第二には、広範なリサーチから得られた豊富で多様な情報や素材を巧みに捌き、読者を無理なく自然に導いてくれる説得力のある議論の展開と全体の構成が挙げられる。議論全体の大きな見取り図として3部構成は効果的で、現在地点を見失わずに着実に読み進めるのを助けてくれる。第三の魅力はストーリー・テラーとしてのThorne-Murphyのうまさである。第2、3部では、異なるジャンル、タイプの作家・詩人による、必ずしもメジャーではない作品も含めた多岐にわたる作品が扱われる。評者は初めて出会う作品も複数あったが、冗長にならず、かつ十分に肉付けされたストーリー展開や登場人物の説明のお陰で、束の間ながら各作品の世界に入り込み、そのエッセンスを楽しむことができた。それらはさながらバザー会場に不可欠なエンターテインメントのようなものだったのかもしれない。